



劉仲敬の中華文明史論（翻訳と解説）

緒形， 康

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 46:1-46

(Issue Date)

2019

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011593>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011593>



劉仲敬の中華文明史論（翻訳と解説）

緒 形 康

翻訳に当たって

二一世紀初頭、許紀霖（華東師範大学、一九五六～）の強い後押しによって論壇に登場した劉仲敬（一九七四～）は、アメリカに言論の拠点を移してから、主にYou Tubeを使った言論活動を展開している。そして、許紀霖や秦暉（清華大学、一九五三～）ら公共知識人が二〇一三年にオックスフォード大学で行った討議を集約した「牛津共識」あるいは「共同底線」という考え方、つまり現代中国における政治改革の最低限のコンセンサスをまず確立しようという呼びかけを批判するようになった。劉によれば、現代中国に支配的なのは共同体が一定の成熟を見た後に可能なコンセンサス政治ではなく、右と左、保守と革新の立場を争奪し合うアイデンティティー政治である。コンセンサス政治が過去の中国に存在しなかったのではない。商周に起源し、春秋戦国に成熟し、秦漢で収束した華夏文明におい

て、有機的な共同体である封建システムの中で、それはある程度達成されていた。けれども、中国史はその後、開かれた封建システムから閉じた官僚システムへと転換した。官僚システムは、東アジア国際社会では朝貢システムとして主張され、多国システムを容認しないこの硬直した考え方が、現在のアイデンティティー政治の混迷をもたらしたのである。劉によれば、三世紀から本格化する遊牧民族の中国史への登場は、この閉じた官僚システムをもう一度外に開くための「憲制」秩序の導入の試みであって、遊牧民の農耕民に向けた侵略の試みではなかった。三世紀以後の中国史は内陸アジアによる「憲制秩序の衝撃」史に他ならず、この歴史を再現することで、アイデンティティー政治からコンセンサス政治への逆転が可能になると劉は考える。こうした問題意識に基づいて、彼は過去の中国文明史の全面的な見直しを始めたのである。ここに訳出したのはその最新作『経と史——華夏世界の歴史構築』（新竹〔台湾〕：八旗文化出版、二〇一八年）の第七章「優孟衣冠」である（二五五―二九五頁）。内陸アジアの憲制秩序の導入史のうち、外部統治から直接統治に向かう過渡期とされる八―一世紀を扱うものである。それは日本の中国史学界が唐末五代の転換期として考察してきた時代に相当する。日本の多くの歴史家が近世（early modern）への革新期と見るこの時代を、劉は、清新な内陸アジアの憲制秩序の導入が、華夏文明の腐敗した官僚システム、バラバラの砂社会、ルンペンプロレタリアートの反乱などの諸要因と複雑に交差しながら、深刻な挫折を経験する歴史として描いている。そこに現代中国の民主化運動の中で苦闘する劉自身の姿が投影されていることは言うまでもない。（原文の丸括弧は訳文でそのまま用い、訳者による訳注を鈎括弧に収めた。）

『経と史——華夏世界の歴史構築』第七章「優孟衣冠」

1. 士族の没落と科挙合格者の勃興

郭子儀（六九七～七八一）と僕固懷恩（六九一～七六五）の停戦協定（七六四年）は門閥政治に対する死刑判決書に他ならなかった。関隴貴族〔武川鎮の軍閥集団〕は軍事の職権を失い、もはや軍事階級には立ち戻れず、宮廷貴族の残存物となって、あつという間に外戚と新興貴族のしがみのなかに埋没した。山海関以東の士族は文治主義の価値観に染まったまま、新興の蛮族との同盟を拒絶し、むしろ兩京〔長安、洛陽〕か江南への亡命を希望して、封建政治と門閥政治が復活する機会を潰すことになった¹。唐代後期の旧士族は土地豪族の性格を失い、朝廷の職位によりかかるだけの存在となった。科挙新人に対して、彼らが勝っていたのは、家族に代々伝わる學術の伝統や社会的責任感がすぐに雲散霧消しなかったことだけである。彼らの先人との関係は、影が形に寄り添うようなものであった。李德裕（七八七～八四九）は新人の軽薄さを嗤ったが、伝統は伝統なき環境で長く自らを保つことはできない。旧人も新人も唐末の大粛清の中で壊滅したが、前者は二度と生き返ることはなかった。

士族の滅亡は大家族の滅亡と同じではないし、まして貧富貴賤の差別の解消を指すでもない。門弟を育てる義務を持った家風とか、社会のために貴顕に左右されない価値の中心を保つことが新人には求められなくなっただけだ。

1 『全唐文・博陵崔府君神道碑』に「天宝の末、盜賊が燕と薊に起ると、公はそれとは距離を置いて官を辞め、一族と共に、東の方、揚子江と淮河に向かった」とある。

目の前の富貴だけが唯一の社会的尺度となり、朝廷の外に自立した社会資源はこれまで以上に痩せ細った。唐の太宗〔五九八～六四九〕、唐の宣宗〔八一〇～五九〕が夢にまで見た理想社会がついに現れたのである。ただ、彼らの子孫にそれを享受する機会はなかった。とは言っても、趙氏の宋室の中には全く正反対の不満を抱いた者がなかった訳ではない。「唐人が崔、盧などの家族を貴族としたため、子孫が貧窮に喘いでも、その家系は重んぜられた。ところが現代では家族はもはや重要ではなく、王族の娘は貧しければ年頃になっても嫁ぐ相手がなく、村の金持ちも元貴族の娘を嫁とし、科挙合格者を婿とする。」お粗末な宋代のお粗末なゆえんは、平板社会が安定を期待できない点にあり、社会の盛衰浮沈がごく些細な要因で決まることにあった。その社会は秦の始皇帝〔前二五九～前二一〇〕のような武断には直面していないかに見えるが、解放を実現した社会のバラバラの砂の間では至る所で武断が行われていた。立身出世し生まれ変わる機会が開かれたかに見えるが、内向した競争モデルは階級や集団を形成する可能性を閉ざした。士農工商は仲間内で競争する孤独な個人であり、秩序を生み、それを伝播する能力をさらに喪失した。封建貴族や門閥士族と違い、科挙士紳は巨人の肩に乗った小人の末裔にすぎない。

印刷術は科挙の拡大と呼応して、書字知識の経験知識に対する勝利を推し進めた³。進士科が明経科に勝つと、科挙は知能テストに変わってしまった。蘇軾〔一〇三七～一一〇一〕はこう宣言した。試験題目がどう変わっても、選

2 趙彥衛『雲麓漫鈔』卷三（北京：中華書局、一九九六年、五一頁）。

3 『少室山房筆談・経籍会通四』に「書籍の版行を、唐人はまだ盛んに行ってはおらず、馮瀛王が五経を印刷してより、典籍はみな板本となった」とある。

拔の結果は大して変わらないと⁴。手続きの公正さから言えば、宋代の科挙は少なくとも唐代よりは進んでいた。けれども、公正さがもつと進むと、さらに多くの不満が漏れ聞こえてきた。隋の煬帝〔五六九―六一八〕が進士科を始めた際、社会は門閥貴族を当たり前のものと考えていた。文学に合格した士紳は二番手の官職で満足した。則天武后〔六二四―七〇五〕が政權を解放し、宋の仁宗〔在位、一〇二二―一六三〕が科挙合格者数を増やして、在野から賢人を広く募るという幻想を振りまいてから、科挙は全国民を巻き込んだ宝籤運動となった。政權がさらに解放され、合格者数が増え、受験者の増加には追いつかず、宝籤ロマンティック会社の大広告にどこまで行っても追いつく術はなかった。科挙の神話は華夏世界に三つの癒しがたい傷口を広げた。経済事業の凋落、官僚政治の腐敗、宗教の衰退がそれである。

「法の精神」は社会に対して間接的な規律作用をもたらす。封建主義の特徴は組織資源が豊富で、やはり強固な職業自治団体を育成したことだ。各業種は騎士に似た名譽感を持つから、干将莫耶〔吳王闔廬が作らせた名劍〕のような伝説が生まれ、悠久なる業種の伝統と精緻な技術が形成される。科挙社会の精神とは、同輩が敵どうしに分かれ、世代が同じでも疎遠になり、才能ある個人主義と短期の利益刺激しか頼れるものはないという精神である。集団の協調や伝統の薫陶に高度に依存する職業は、粗雑な実用主義へと退化するばかりだった。技術を伝承できるのは血縁家族の他にはほとんどない。家族が累代続いても、バラバラの砂社会特有の絶滅戦争に抗するのは難しい。「在野から賢人を広く募る」ことは各業種のエリートを引っっこ抜けばかりでなく、それ以外のメンバーの自負心、名譽感、責任

4 蘇軾「策総序」。

感をも奪ってしまうから、彼らは知恵を磨くことには努めても、労働倫理は輕蔑するようになる。スイスの諸州や日本の諸藩の工匠を見れば、その家系が領主よりも長い歴史を持ち、職業を名譽とする感情が自らの生命よりも勝っており、工業化の時代の到来を十分に準備していたことが分かる。平板社会の宗族には門閥貴族の凝集力や礼法の伝統がなく、平和な時代でもその豊かさは三代とは続かず、戦争の時代には絶滅あるいは離散の可能性が生存のそれをはるかに上回る。門閥大貴族が千里の長征によって、その家族を南朝という国家へと変えたドラマは失われた。継続は難く、破壊は容易く、宋明以後の社会の生態自然は日に日に悪化していった。バラバラの砂社会はそれに先立って粗野な大衆民主時代を生んだが、そこに欠けていたのはまさに大衆民主のエネルギーであった。

腐敗は官僚国家に固有の特徴だが、その度合いは社会の平板化への傾向に正比例している。貴族や門閥の社会的地位は官職によって決まるわけではなく、仕官は政治目標を達成するためのもので、収入も俸祿のみで成り立っていない。官職から、政治的意見が合わなければ何時でも辞任し故郷に帰ることができた。平民の野心家は官職をなくしてしまえば、残るものは何もない。家族の前途や自分の結婚は科挙という大博打次第である。教育や仕官に必要な出費は門閥貴族にとっては取るに足らず、彼らは朝廷や地方政府に無償のサービスを提供した。平民の野心家が何代かけても払いきれない位のサービスをである。平民野心家は、だからいつも勝てつこない状態、あるいは半分負けた状態に置かれている。チャンスを得ながら、妻子や家族を救うための犠牲を拒むのは極悪非道であるから、腐敗を拒むこととほど不道德な行為はないことになり、こうした行動パターンは軍人が戦いに臨んで武器を捨てることに等しい。岳飛（一一〇三―四二）が学生時代に家族の資金援助に頼ったことで、節操なき親族をその軍隊にたくさん入隊させることになったのは、「岳飛軍」の名を汚すものだ。しかし、彼の偉大さは私事に拘らず、社会的責任感をどこまでも

失わなかった点にある。楊再興（一一〇四―四〇）が悪事を働く岳飛の弟、翻を殺害しても、岳飛が楊再興を登用し続けたことは、不肖の輩ならこれとは反対の選択をするだろうから、その名声が虚偽でなかったことを示すものである。社会の生態システムがすべて腐敗によつて維持されていた以上、人が賢か不肖かの違いは腐敗しているか否かにあるのではなかった。唐人の伝奇、宋人の平話（口語文学）、金元の雜劇はこれら野心家の白昼夢を描いたもので、変態心理の博物館と称して良い。投機家の人格と道徳はひどく歪んでおり、彼らの眼に映ずる世界は一幅の漫画である。東周の貴族は政治哲学や愛国主義のために闘うのを常とした。六朝隋唐の門閥貴族は同族と地縁のために闘った。宋明の士大夫は地位と役職のために闘った。

門閥時代の宗教によつて平等主義は庇護されており、その思想界での地位は、下級貴族や軍人が政界で占める地位に等しく、平民階級の最高の知性と最大の希望もここに集まっていた。晋代と唐代に仏法が全盛を極めたのはそのためである。唐代の活版印刷書籍中、仏教經典は儒教のその一〇倍であった。新儒家による仏教排撃は士大夫の狭い範囲内の出来事にすぎず、哲学を語る精密さと緻密さにおいて、到底それらに比肩しない。廃仏運動の期間は短く、その地域も北魏の同種の迫害よりもっと小さかったから、甚大な影響を与えたとは言えないだろう。こうした打撃

5 『宋史・楊再興伝』は以下のように描いている。「楊再興は、賊將曹成の軍人であった。紹興二年（一一三二）、岳飛が曹成を破り、莫耶関に入った。岳飛の第五將軍である韓順夫が自らの武装を解き、捕虜の婦人に酒を注がせた。そのとき再興が兵を率いて營にいきなり入ったので、岳飛の官軍は退き、再興は順夫を殺して、さらに岳飛の弟の翻を殺した。成が敗れ、再興は谷川に飛び込んで逃げたが、張憲がこれを殺そうとすると、再興が『わたしを連行して岳公に会わせてほしい』と言ひ、縛に付いた。岳飛は再興を見ると、その容貌を奇とし、その縄を解いて、『あなたを殺すことはしない。忠義をもつて国に報いてほしい』と伝え、再興は拝謝した。」

が仏教の思想的な創造力を前になす術もなかったのはもちろんである。とはいっても、晚期仏教の最大の特徴は思想的な創造力の衰退であった。訳経の情熱が衰え、偽造經典が激増した。学派の争いが影を潜め、禪宗のポストモダン式の逃避主義が取って代わった。寺院の組織資源や周囲の社会もそれに合わせて退化し、僧侶は展望を欠いた遊民へと変貌することになった。こうした相互に関連する系統的な変化のなかで、人材の消滅は決定的な働きをした。玄奘〔六〇二～六四〕のような第一級の人物なら、蘇軾の時代に生まれても、知力検査の科挙で勝利者となれないはずはない。しかし、慧能〔禪宗第六祖、六三八～七一三〕やその継承者が宗教を放棄しても、科挙に合格できる能力が陳友定〔朱元璋と覇権を争う、一三三〇～六八〕のような第一級の人物より高かったとは思えない。唯識論に玄奘が惹かれたのは、ポストモダンズムに慧能が惹かれたのと同じく自然の成り行きである。官僚たちが仏教を軽んじたように、士大夫エリートは僧侶エリートの地位を軽んじた。禪宗の門徒が謝靈運〔三八五～四三三〕や梁の武帝〔四六四～五四九〕のような知性の興味を引くことはおそらくなかっただろう。けれども、明清時代の仏教寺院ならむしろ明の太祖〔朱元璋、一三二八～九八〕や清の高宗〔乾隆帝、一七一～九九〕のために邪教を動員したのではないかと疑って良い十分な理由がある。白蓮教といった民間信仰と仏教がますます見分けがつかなくなったのは、そのこと自体、階級の地位が下降した何よりの証拠であった。

貴族は部族の長老や軍人から現れたが、彼らが資源を積み重ねてきた文字なき時代は、太陽に向かう大樹の根がその生い茂る枝葉よりはるかに深いように、人類の既知の文明史よりもはるかに悠久なものだ。彼らが成長した場所だけでなく文明を生み出す基盤が存在した。門閥は清議をコントロールできたが、士紳はむしろ科挙によって作り出されたものだ。学閥が資源を積み重ね、士族から門閥へと変化するまでには、何百年という時間を要し、その衰退にかかる

時間も同じであった。士紳が科挙によつて利権を獲得する資格を有するには、何世代かが富貴を作り上げれば良く、その消滅も同じような短い時間で足りる。貴族が共同体の青々と茂る松柏を作り上げるとするのなら、門閥は地方を庇護する鬱蒼たる灌木の叢林であり、士紳は一年ごとに伸びては枯れる野草である。とは言つても、野草にだって土壤を守る機能は備わっているだろう。灌木に取つて代わつた野草も砂漠化に抗する最後の防波堤であることに変わりはない。それらが衰退した地方では、砂漠の荒野が枯れ果てた草の下から獐犢な姿を現わすだろう。靖康の変（一一二六―二七年）以後、揚子江の南北は草原と砂漠の先鋭なコントラストを現出した。士紳が統治する両浙（錢塘江南北）は平和な時代には儒教の風雅の故郷であつたが、戦争の時代には自衛団と国家復興主義の最後の砦であつた。華北の零細化した小農民は官僚国家や盜賊に面と向かつて対峙し、赤子のようにその陵辱するがままとつた。彼らは平和な時代には礼儀を知らず、家族の感情を欠き、流民文化の残酷さと狡猾さに深く侵食され、王船山（明末清初の遺民、一六一九―九二）からはその華夏の資格を剥奪してはどうかとまで言われた。それが戦争になるやいかなる抵抗も示さず、首都が陥落するやすぐさま投降し、敵のために奔走するのにいささかの呵責もなかつた。

士紳のパトロンの機能は、彼らの郷土共同体から生まれたものであるが、すでに触れた岳飛はその必ずしも代表的な例ではない。彼は相州（河南省安陽市）の大家族の出身だつた。個人に才能があつても資金を欠く場合、家族の集団主義の支持を当てにできるが、その資金はもちろん無償ではなく、血縁と倫理の默契という互恵關係に基づいてゐた。岳飛は宮廷に出仕するや、親族の子弟を仕官させた。彼が苛斂誅求の結果、故郷の親族に土地や不動産を買い与えたのは至極当然のことだつた。彼もやがて朝廷を退いて、故郷に帰り、親族を頼つて穏やかに晩年を過ごすはずだつた。その仕官の時代は、郷土共同体が派遣した首都駐在の国会議員であり、故郷のために利を図り害を除く力を

有した。朝廷の深い信頼を得られていれば、彼が交渉するまでもなく、彼の故郷はいかなる苛斂誅求や勞役割り当てからも逃れることができただろう。その結果生じる赤字の埋め合わせは、朝廷に報告されるコストがずっと高いという理由だけで、優れた士紳を輩出しなかった他の地方の上に降りかかっただろう。朝廷あるいは赴任先で苛斂誅求したものを、彼なら最後には必ず故郷の父老たちに分配しただろう。彼はいつも朝廷の悪党であり赴任先の庶民の疫病神であつたが、故郷の父老たちにとっては恩人であり友人であつた。士紳は自らの郷土共同体を持つ点で宦官の天敵である。宦官とは、マルクスではなく、トインビーが述べた意味におけるプロレタリアートであつた（トインビー（一八八九―一九七五）は『歴史の研究』でプロレタリアートを文明の解体者と捉えた）。宦官は多くの物質的財産を持つことが常だが、自らの郷土共同体は持たず、宮廷に死すことが運命付けられていたから、宮廷の利益のために地方を搾取した。それを阻止し、自らの老後を過ごす故郷を守ることができるのは士紳を措いて他になかつた。兵火が起これば、士紳のネットワークでしか自衛の軍隊を維持することはできない。郷里に曾國藩（一八一―一七二）や趙景賢（一八二―六三）を擁していなければ、悲惨な結末が待っているだけだつた。士紳という英雄がそうした郷里の定められた悲惨な運命を変えようとするなら、もつとも手早い方法は共同体の公共教育に投資することだつた。できるだけ早く、できるだけ多くの、朝廷に派遣できるような自らの代理人を養成することだつた。

もちろん岳氏の宗族はこうした典型モデルに忠実に従つたのではない。靖康の変によって、その内のかんりの家族は南方に追いやられ、軍事資金に供する茶葉独占経営を始め、揚子江を渡る貿易商人を大いに苦しめた。その北方に残つた親族は歴史から消滅した。金が減び、元が減んで、黄河が何度も決壊したために、北方の人口は壊滅して、その生存の機会は大きく制限された。生存できたとしても、明の太祖による強制移住によって小農民の大海の中に没し

てしまっただろう。小農民のバラバラの砂は強力な士紳を生み出すことはなく、郷里周辺と親族を組織する凝集核を失っていた。郷里周辺および親族の強力な組織がなければ、公共教育に効果的に投資することはできない。公共教育に効果的に投資できないと、朝廷駐在の代理人を生み出せず、自衛の軍隊を組織するパトロンや、水利・公共事業を興すブローカーを生み出せない。こうした凝集核がないと、平和な時代に土地がやせ衰え、戦争の時代に人口が絶滅する悪夢を回避できない。少しでも聡明で富裕な士紳なら、できるだけこんな場所を離れようとするだろう。その結果、潜在的な凝集核はさらに減ってしまうのである。悪性循環の連鎖で、西周や東周、孔子や孟子の故郷が流民と盜賊の中心生産地となってしまった。彼らはそうした悪循環からかろうじて生き残った者たちであり、他の場所を略奪する以外に突破口はなかったのである。彼らは野蛮な生存環境にすっかりなじんでしまったため、やはり野蛮な手段を用いて当然のごとく豊かな近隣に向かうことになった。彼らの略奪によって他の場所の組織資源が壊滅してしまうと、その場所も癌細胞が転移し拡散するように、流民と盜賊の更なる生産地が変わってしまう。

朝廷はシステムなき反乱が貴族・門閥・士紳のシステムの反抗よりも治療がもっと難しく、暴力による鎮圧は社会の砂漠化と組織の癌細胞化の速度を加速するだけであることに気付いたが、時すでに遅かった。官僚国家の精神は砂漠化によって、社会の抵抗力を減退させ、垂直的管理の上限を引き下げることになる。官僚国家があれば朝廷もないから、朝廷はこれに相応する代価を支払う以外にはない。盜賊主義は官僚国家の論理的な終結点であり、官僚国家の論理の中にそれを救済する可能性は皆無であった。文明とはシステムと組織の時間空間における孤島だが、野蛮とはシステムなき茫洋たる大海である。文明はシステムなき自生秩序に生まれ、その内部に生じたシステムなきものに食い尽くされ、前歴史時代よりも残酷な二度目の野蛮状態に陥る。蛮族の征服者がそこに降臨するなら、それ

は没落した文明が望みうる最大の幸福である。したがって、征服とは、それを定義するなら、秩序の輸入に他ならない。蛮族は秩序を積み重ねた者であり、文明は秩序から奪い取る者である。蛮族が没落した文明を征服するのは、実はひとつの自己犠牲であって、自ら独立した文明を生み出す機会を放棄して、自己のそれまでの積み重ねを用いて没落した文明を救済するのだ。

2. 蛮族傭兵の興起と没落

蛮族は河北に侵入し、経学の士族たちを追い出した。趙と魏の地には名だたる儒者が多かったが、一転して河朔三鎮〔盧龍・成徳・魏博三藩鎮、河北省を中心とする〕は夷狄に蹂躪された。唐室は手をこまねいたまま、夷をもつて夷を制すべく、回鶻〔ウイグル人〕ならびに朔方〔内モンゴル自治区〕・北庭〔新疆ウイグル自治区〕・安西〔トルファン、クチャ〕各路の異民族軍隊に頼った。郭子儀は彼らの精神的なリーダーかつ連絡者に過ぎず、戦闘を率いる大将である李光弼〔七〇八～六四〕、僕固懷恩、白孝徳〔七一四～七九〕はみな異民族の將軍だった。朝廷は蛮族傭兵のブローカーと化し、江南の富を転送し配分する経営の責任を負った。皇室が収入を分配する仕事をうまくできなければ、忠誠心の厚い朔方軍でも反乱する可能性があった。唐の徳宗〔在位、七七九～八〇五〕は綱紀刷新を期したが、財政問題によって、さっそく陣営内部の反乱を招いた。全ては金の問題だと彼は忽然と悟った。そこで、残りの人生を苛斂誅求に充て、魏晋の時代に廃止された貨幣税を改めて取り上げ、塩と茶の独占によって陥落地域から消費税に当たるものを徴収した。憲宗時代〔八〇五～二〇〕の短い勝利は国庫の蓄積を蕩尽し、穆宗〔在位、八二〇～二

四」が緊縮財政と軍縮政策を採らざるを得なかったため、河朔三鎮は再び反旗を翻した。けれども、牛僧儒〔七七九～八四七〕が述べたように、反乱はその実、朝廷に有利であつて、東北の軍人を買収したり契丹前線を防衛する巨大な支出を節約できた。盧龍鎮、成德鎮、魏博鎮が辺境の安定を守り、それ以外の節度使を侵略することもないのに、一統をたつと偏見に固執する必要はなく、まして彼らの代わりに朝廷が金と血を購う必要もなかった。本音を言えば、張弘靖〔七六〇～八二四〕といった文官が東北を守備するよりも、李懷仙〔幽州節度使、？～七六八〕のような異民族の將軍がそうした方がずっと良い。張弘靖の家族は中国内地にいるから、短い任期をなんとかやり過ごすことしか考えず、地方の利益や将来の利益に注意を払うことはない。李懷仙は軍団が推戴したリーダーで、辺境の藩鎮の恒久的な利害関係者だから、辺境の藩鎮の富の源や財源がどこにあるかを熟知しており、朝廷の出費や転送をあてにすることなく、辺境防備と民衆安堵の任務を果たせた。

河北、中原、西北の藩鎮は内地に移住した異民族軍隊の後裔と言つて良く、その軍事資源は部族の伝統と深く関わっている。彼らの侵略は藩鎮社会の異民族化を惹起し、儒生や一統をたつとぶ考えを持つ者たちの大いなる憤激を買つた。だが、彼らはこの時代で最も安く済む軍隊だつた。朝廷はさらに別の三つの軍隊によつて彼らを制御しようとしたが、こちらの方が経費はずつと高く付いた。第一の軍隊は近衛軍だつた。安史の乱の後、南衙禁軍は儀仗隊にまで退化していた。北衙禁軍は羽林軍、龍武軍に加えて、神武軍、神威軍、それから最も重要な神策軍を増設した。神策軍は哥舒翰（トルコ人武將、？～七五七）の旧部で、隴右〔陝西省、甘肅省〕、河西〔甘肅省以西〕、安西、北庭の各路の勤王の師団を糾合したもので、侵略した吐蕃人を長安から追い出し、以後、禁衛軍と称せられた。神策軍は野戦部隊に出自するから、その戦闘力はかつての禁軍を凌駕した。唐の徳宗は藩鎮に絶望し、首都周辺の安全を保つ

責任をこの軍隊に押し付け、子飼いの宦官に統率させて、他軍の給与の三倍という破格の待遇で各藩鎮の駐在兵を引きつけた。徳宗が貪欲をもって知られたのは、主に直属部隊への支給のためであった。第二の軍隊は南方各鎮にいる補助部隊で、劍南鎮〔四川省西部〕、安南鎮〔ベトナム〕の辺境軍の他は、自前の軍事システムを欠いており、正規兵は少なく、土着軍団が多かった。土着軍団には大量の郷土兵がおり、朝廷の搾取に抗する道具になるのは容易かった。唐末に苛斂誅求の度が増すにつれ、南方の各藩鎮は土着軍団によつて惹起された混戦に広い範囲で巻き込まれた。この混戦の勝利者が誰であれ、朝廷の補給線が傷つけられるのは必定だった。第三の軍隊は本当の意味での異民族兵で、回鶻から沙陀〔トルコ人〕に至るまで、彼らは快刀乱麻を断つごとく、朝廷のために半蛮族の雇用兵やルンペンプロレタリアートの傭兵に打撃を与えたが、その対価は朝廷には耐え難いものだった。藩鎮や蛮族が世界帝国を分割し、官僚国家に新たな色彩を添えた。

盧龍鎮の歴史は契丹の帰順者である李懷仙〔？～七六八〕の投降から始まる。彼は史朝義〔？～七六三〕を誅殺して、朝廷の面子を保った。僕固懷恩の停戦協定が朝廷の二方面作戦にかかる重圧を解き、吐蕃が更に領土を拡張する機会を終焉させた。盧龍鎮は最も忠実に停戦協定を遵守した。その野心は自己保存に限られており、その反乱は朝廷による併呑の企てに対してのみなされた。ただ、盧龍鎮の軍事集団は安祿山〔七〇三～五七〕と史思明〔七〇三～六一〕の最悪の伝統を受け継ぎ、安定した後継者決定の制度を樹立することができなかった。李懷仙から劉仁恭〔？～九一四〕に至るまで、終わりを全うした節度使は少なく、安慶緒〔燕の第二代皇帝、？～七五九〕、史朝義流の弑虐と篡奪が一般であった。節度使にははっきりした種族的な背景があるわけではなく、その時々が必要に応じて兵士のご機嫌取りのポーズを示すだけだった。軍官の家族は中国内地におり、朝廷への態度表明が何であれ、国境を越えて

出兵することを嫌がり、上官の節度使を強く掣肘する力を持っていた。節度使はといえば、朝廷には従順で、部下には強く当たる傾向があった。劉綎（？～八二一）が幽州（北京市）を朝廷に献上したのは、こうした矛盾が一挙に爆発した結果である。彼による軍官の殺害は朝廷による特別親衛隊への賞与と符節を合わせたものであり、安祿山の旧部隊の謀反の感情をしばらくの間抑えることができた。傲慢で軟弱な士大夫は、節度使が特別親衛隊の機嫌を取るような河朔三鎮の風習に従うことを拒んだため、新たな反乱が急速に醸成された。今度という今度は、軍隊を進駐させ鎮圧に向かわせるに足る経費を集めることが朝廷にはもはやできなかった。

盧龍鎮の軍人が彼らの英雄である朱滔（？～七八五）を懐かしむさまは、楚人の懷王（？～前二九九）への追慕に似ている。朱滔が忠臣という虚名に釣られ、朝廷のために河朔三鎮の同輩たちを征服し、かえって朝廷の裏切りに遭ったのは、これまでのどの逆賊よりも哀れであった。朱克融（？～八二六）は朱滔の遺児をかつぎ、長安に落魄した時代に学んだ縦横術を駆使して、アントニウスがローマの民衆に遊説してブルータスを追放したように、盧龍鎮の軍団の忠誠心を獲得した。彼は恥知らずにも敬宗（在位、八二四～二七）の朝廷を騙し、朱滔が戦場の功労と自己犠牲によっても得られなかったような褒美にかえってありついた。遺憾なことに、民衆の推戴は総じて反復常なく、武装した民衆はただの民衆よりもっと残酷だった。軍人は金銭のやり取りで忠誠心を買うことに嫌気がさし、朱氏一族を誅殺した。軍事エリート集団の新たな寵児である李載義（七八八～八三七）は、盧龍鎮だけの力で、則天武后や玄宗（六八五～七六二）を守った奚人（モンゴル高原原住民）を打ち破った。彼は横海鎮（河北省滄州市）の軍隊が反乱した機会を捉え、朝廷の北方の基地である滄州（河北省滄州市）を徹底的に略奪した。横海鎮は朝廷が河朔三鎮に打ち込んだ楔だったが、河朔三鎮と同じく反乱を好んだので、三鎮の協力がなければ鎮圧が叶わなくなっていた。

朝廷の感涙は、彼の判断を狂わせ、自分の姓氏が皇帝の李と同じであることに思い至った。しかし、それは時と所を得ないものだった。実際、李唐の同姓である彼がほんとうに宗室の遠縁の子孫であったとしても、李賀（七九一―八一七）以上に朝廷の厚遇を得ることはあり得なかった。こうした危険で曖昧な傾向は、盧龍鎮の同輩や部下の許容範囲を超えていたから、李載義はほうほうの態で家族を挙げて逃亡するしかなかった。

盧龍鎮の軍人はここから教訓を得、卑しい出自の楊志誠（？―八三五）を選出したが、楊が監軍や宦官の容喙を受け入れる姿勢を見せるや否や放逐した。牛僧儒政府は民衆と財政を犠牲にしてまで河朔三鎮の内政に干渉することはなく、藩鎮が蛮族を遠ざける有効な緩衝地帯であると考えていたので、長安と盧龍の間にはその後一〇年にわたる同盟関係が維持され、李徳裕が復活しても、それは変わることがなかった。八年間で三度に及んだ軍事クーデターによって雄武鎮〔甘肅省〕の前線を防衛する張仲武（？―八四九）が節度使の玉座につき、盧龍鎮の栄光の時代が始まった。彼は回鶻の烏介カガン（？―八四六）を撃退し、東方に依った契丹人に壊滅的な打撃を与え、軍人たちに子息の張直方（？―八八一）への節度使継承を承認させることに成功した。張直方はいえ、父親の名声を使うことで、成徳鎮の平和的な継承方法を盧龍鎮にも適用する機会があったにもかかわらず、荒淫逸楽が災いしてそのチャンスを失った。軍事エリート集団はさつさと彼を放逐し、盧龍鎮の威勢赫赫たる軍事民主制を復活させた。残唐五代の混乱にあつて、こうした憲制こそが安祿山の継承者たちを消滅させることができたのである。

「河北の驕兵と悍民の気焰は天を衝き、阻むことができない。」成徳鎮の憲制は堅実をもって聞こえ、長安の朝廷や

その士大夫を顔色ならしめるものだった。李宝臣〔七二八～八一〕父子は、成徳鎮の異民族騎兵の代理人として、徳宗と盧龍の朱氏が藩鎮の勢力を削ぐ計画に甚大な打撃を与えた。契丹人の王武俊〔七三五～八〇二〕と回鶻人の王庭湊〔？～八三四〕の家族は代々成徳鎮を統治してきたが、河東鎮〔山西省太原市〕の沙陀集団が支配者になると、蛮族の傭兵全てを編成し結束させた。魏博鎮の憲制は蛮族の藩鎮による第三の典型を現しており、軍事エリート集団が世襲の親衛隊で編成されていた。盧龍が軍事民主制からくる恒久的な不確定要因を体现するなら、成徳は傭兵集団の貴族制の個人支配を、魏博は軍事寡頭制の理想モデルを体现していた。代々の節度使は親衛隊の階級意志を満足させねばならず、さもないと、朝廷や特別親衛隊の援助などは望むべくもなかった。田布〔七八五～八二二〕が自殺してから、節度使の継承権はその威光を失った。

平盧鎮〔山東省〕は河朔三鎮の軍事集団の中の高麗人反逆者が創設し、遼東半島西部から安祿山と史思明の背後を攻撃し、それが失敗するや海上に逃れ南下した。唐の肅宗〔在位、七五六～六二〕は彼らに報償を与えるか手なづける必要を感じ、青州〔山東省淄博市〕を平盧鎮の管轄区に編入した。こうして彼ら高麗武士は故郷の土地を回収する機会を永久に失った代わりに、徐州、泗州〔江蘇省淮安市〕を支配した時代に大幅に領土を拡大し、ついに山東一五州を占拠した。侯希逸〔七二〇～八一〕と李正己〔七三二～八一〕の軍事集団の戦闘力は大きくはなかったが、地方自治、農業水利建設、傑出したスパイ工作で聞こえ、ために弱きを挫き、強きを恐れる憲宗朝廷の最初の攻撃対象となり、平盧と天平の二鎮に分解された。朝廷は平盧鎮を牽制するために、徐州に武寧節度使を置き、蛮族に代わってルンペンプロレタリアートに武装させるその後の長い歴史を切り開いた。以後の歴史で証明されたことだが、ルンペンプロレタリアートの武装が朝廷と庶民にもたらす災難は蛮族の比ではなかった。武寧鎮の傭兵集団は離叛を繰り返

し、ついに龐勛（？～八六九）が率いる桂林国境警備軍の大反乱を惹起し、南方の各鎮や土着集団を一掃して、黄巢の乱（八七八～八四年）の大虐殺の予行演習を行い、朝廷に迫って蛮族の武装者では最後となる李克用（八五六～九〇八）の沙陀集団に助けを求めさせた。高麗の藩鎮が滅亡してからは、山東がもう一つの呉越になる可能性は消え去った。朝廷による断続的な干渉は藩鎮が長期にわたって行ってきた建設の努力を破壊したが、朝廷を守ってくれる代理人が効果的な統治を行うまでには至らなかった。長い政治動乱と短い苛斂誅求は崔や盧といった門閥貴族や鮮卑貴族が営々と築いてきた社会資本を壊滅させ、山東は南燕、北齊を支える財政基地から、朝廷のお荷物と盗賊の楽園へと変貌した。

淮西鎮（河南省駐馬店市）は平盧鎮とその性質が酷似しており、李忠臣（七一六～八四）が率いる安史反乱軍からの投降集団であった。朝廷は東北の蛮族の武装司令部を中原地帯に置いて、安史反乱軍が南の江南の財政基地を侵略するのを阻止しようとし、朔方軍（寧夏ウイグル自治区銀川市）麾下の蛮族武装と各同盟軍の司令部を北ラインと西ラインに置いて、安史反乱軍の占領地域を攻撃しようとした。こうした配置の仕方が親疎の区別をはっきりと示している。安史の乱が終わるや、東北の蛮族は反乱予備軍に落ちぶれ、新たな監視対象となった。臨淮（臨沂県）の王である李光弼（朔方軍の希望の星であった）が中原に進駐し、その攻撃の矛先を平盧鎮と淮西鎮に向けた。李光弼が死ぬと、東北の蛮族は公然と朝廷に反旗を翻した。朝廷は自らの直系部隊を投入せざるを得ず、ここに忠武鎮（河南省許昌市）が生まれる。忠武鎮の黄頭軍は朔方軍のテュルク部族の出身で、彼らの酋長である李（朝廷より姓を賜った）光顔（七六二～八二六）が陳と蔡の境界に進駐し、淮西鎮の呉氏を牽制して、淮南鎮（江蘇省揚州市）から宣武鎮（河南省開封市）までの運河輸送の安全を確保した。この運河は長安の朝廷や禁軍の生命線であったから、揚州

〔淮南鎮〕や汴梁〔開封〕（宣武鎮）の節度使は宰相に匹敵する朝廷の重臣と決まっていた。「李愬（七七三～八二二）が雪夜に蔡州に入る」（元和二年（八一七）十月初十の雪夜、西路唐軍統帥の李愬が淮西鎮の呉元済を蔡州（河南省汝南市）で奇襲攻撃し、藩鎮割拠の局面を打開して、唐朝の統一を一時回復した戦闘）とは長きにわたる闘争の劇的な表現であり、その最終的な功労を李愬という皇族の姻戚に帰したものだ。が、実際は、黄頭軍の数十年にわたる激戦によって李忠臣―李希烈（？～七八六）反乱集団の残余部隊を殲滅することが可能になったのであって、その他の鎮はほんの申し訳程度に参戦したにすぎない。この戦役の勝利が晚唐朝廷の生存を担保し、西北軍の朝廷を支える中核としての位置を確定した。忠武鎮の將軍たちは朔方軍の伝統に忠実で、長安の陥落にも動揺することはなかった。彼らは反乱に乗じて勢力を拡大する最後のチャンスを手離し、黄巢やその残存部隊である秦宗權（？～八八九）を殲滅するために甚大な犠牲を払い、日和見主義者である朱全忠（八五二～九一二）に滅ばされてしまった。彼らは唐室のための弔い合戦を行い、唐室と共に滅んだのだが、唐の太宗やその継承者がかかる「一人への忠誠」を貫く質朴な蛮族を偏愛した理由もここから分かうというものである。

義成鎮（河南省鄭州市）は忠武鎮とその性質を同じくし、李光弼麾下の九つのソグド姓（中央アジア部族）から成る。その継承者である段秀実や馬麟はみな西北軍の元メンバーで、朝廷には比較的忠実であった。義成鎮が宗室や大臣に統率されたのはそのためである。けれども、まさにこうした理由から、義成鎮は忠武鎮の軍事伝統を受け継ぐことができなかった。彼らはまず黄巢には全く歯が立たず、最後には朱全忠にも抗する術がなかった。横海鎮と深翼鎮〔四川省〕はその性質が良く似ており、朝廷が河朔三鎮の後方の伏兵として配置したものだ。そのため、二つの鎮は時代に翻弄され続け、その節度使はほとんど終わりを全うしなかった。神策軍の旧将である牛元翼（？～八二三）は

朝廷のために家族を犠牲に捧げたが、朝廷は彼を守ることができなかった。昭義鎮（山西省、河北省）は太行山の両側にまたがり、河朔三鎮の地政学的な政治一体性を破壊することを目標とした。この藩鎮は、最初は朔方軍の支部隊であったが、朝廷に投降した多くの東北系異民族將軍を接収したため、安定した部族の軍事伝統を維持できず、危険な地政学的環境からも巨大な戦いの圧力を被り、特殊な「軍事化」社会を形成することになった。昭義鎮は官僚国家の精神を軍事訓練に適用し、科擧の合格者の特権的待遇を軍事訓練の合格者に授け、山地民のなかに強靱な歩兵を養成し、東北系および西北系の蛮族の間にあつて頑強に生き延びることができた。河東鎮と河中鎮（山西省運城市）は朔方軍の要員であり、李光弼が征服した主要な基地であつた。太原は朝廷における北京（北の行政中心地）であり、河中は長安の入り口であつた。朔方軍に朝廷を防衛させたいのであれば、朝廷はこの二つの鎮を絶対に外部の人間に譲つてはならなかつた。内地移住させられた西北各軍の蛮族が、沙陀といった新たな勢力に抗する力をなくしたとき、朝廷は自殺委任状に署名することを余儀なくされた。

邠寧鎮（陝西省咸陽市）と振武軍（内モンゴル自治区フフホト市）も朔方軍の支部であり、二つの鎮の創始者である白孝徳と渾瑊（七三六～九九）は李光弼麾下の蛮族の將軍だつた。江南の運河輸送が朝廷を維持するに足るものである限り、彼らからの資金供給はその忠誠の度合いを担保することができた。淮南鎮の節度使がその人材を得なければ、西北軍の資源は蛮族の軍人を引き続き招致する基盤を失う。この二つの鎮はしだいに空洞化し、ついには近隣の藩鎮に併呑されてしまふだろう。黄巢の乱が終わると、こうした状況が急激に現実のものとなつたのである。鳳翔、涇原、定難の三鎮（陝西省）は元来は西北の蛮族の軍事システムであつたが、すぐさま吐蕃に敵対する主戦場と化し、各地の藩鎮の援助を仰がねばならなかつた。戦争が激しさを増すと、神策軍の一系統が優勢を占めた。唐・吐蕃

戦争〔六七〇～九六〕が終息するや、西部戦線の各鎮の軍事システムは混乱を極めた。運河輸送が中断され、各鎮はそれまでの力を失った。彼らが滅亡しなかったのは、孤立した地政学的形勢のためと、併吞が割に合わなかったためにすぎない。定難軍が河西回廊や回鶻と吐蕃の部族を征服しても、朝廷への資金供給を一手に引き受けられるまでには至らなかった。西夏にしてみれば、宋人からの歳幣と唐人からの物資補給の間には何ら、あるいはほとんど区別がなかった。

朔方軍は安思順〔？～七五六〕と哥舒翰〔？～七五七〕の経営になるもので、郭子儀や李光弼を輩出した。安史の乱から朝廷を救うことができたのは、ここが、朝廷と深い関係にある幾つかの藩鎮の共通の母親だったからだ。けれども、子供である各鎮の繁栄も母親の厄災を防ぐことはできなかった。神策軍の勃興と李懷光の河中鎮での失敗〔七八四年〕は、西北にあった忠誠なる部族連合に深刻な打撃を与え、朝廷のマキアヴェリズムが朝廷自身とその最大の支柱を敵に売り渡してしまった。李懷光の反乱が僕固懷恩のそれと同じく、將軍の恩を朝廷が讐で返した結果であることを朝廷は分かっていたが、その誤りを頑として認めようとはしなかった。他の藩鎮の勤王の動機が河東鎮と河中鎮の土地を分割することにあつたからである。李光弼が反乱を鎮圧してからも、河東鎮の高原地帯は朝廷を防衛する真の意味での核心であり続けた。朔方鎮の中心は遠く孤立しており、河東鎮の後方支援部族軍を補充することができなすぎない。李光弼は朝廷経営の防波堤であつて、彼がいたからこそ外部や敵対軍は朝廷を破壊する口実を得られただのである。朝廷の敵たちは、忠誠という名のもとに、朝廷の友人である李光弼を肅清した。これ以後、エネルギーを使い切った母親はもはや朝廷のために新しく忠武軍を育成することはなかった。神策軍は朔方軍が得ることのできなかった資産を得たが、特権階級の子弟で編成される儀仗隊へと急速に退化した。西部戦線を受け持つ各藩鎮は西北

国境にあった部族の軍人を補給できなくなり、どこにでもいるルンペンプロレタリアートの傭兵に成り下がった。朝廷が首都から蒙塵したその日（九〇三年）、彼らは東方の継承者たる朔方軍の忠誠を示すことがなかった。その利益や存在は朔方軍よりもずっと深く朝廷の安泰に依存していたというのである。唐の昭宗の朝廷（八八八―九〇四）は、黄巢と沙陀人がもたらした破局を接収した際、もはや李光弼の再来は望むべくもないことを理解した。蛮族パトリオンのゲームが終末を迎え、ルンペンプロレタリアートの天下が現れようとしていた。沙陀人の天命は、蛮族が他族に嫁ぐ不名誉な歴史を終わらせ、建国者と征服者の新たな役柄を準備するための道が戒い清められた。

3. 残唐五代の藩鎮、憲制、共同体

残唐五代は野心ある藩鎮に多様な経路を可能性として提供した。朝廷に最も近い藩鎮は極めて大きな誘惑にかられるまま、天子を擁して諸侯に号令を発する機会を争って求め、藩鎮そのものを破壊する危険を大幅に増大させた。岐王の李茂貞（八五六―九二四）が生き残れたのは隴右鎮の荒廢のせいであって、その力量が雄壮で政策が慎重であったからではない。岐王には建国の野望もなければ、その能力もなく、宣武鎮の朱全忠の恨みを買ったため、唐室の藩国という身分を堅持しようとしたにすぎない。後唐は汴梁を占拠した後、鳳翔鎮（陝西省宝鸡市）が献上した素晴らしい土地を手に入れた。鳳翔鎮は、国境から遠くにあつて栄華を誇る朔方鎮と同じく、汴水の運河輸送体系（通済渠）の負担を分担する運命にあつた。温韜（？―九二六）は略奪に長じ、韓建は苛斂誅求に長じていたが、彼らの地理的位置は汴梁から十分には離れていなかったため、すぐさまその餌食となった。関中は朝廷のお余りで生き延びる

ことに慣れきっており、朝廷がなくなり全国がそれに殉じた後は、もはや群雄の争奪の対象とはなれなかった。残唐朝廷はひとつの記号であり、蛮族の武力や運河輸送による財貨と賦税を規律化するためにだけ存在していたにすぎない。蛮族が河東鎮に集中するのは、長安に集中するよりずっと都合が良かった。財貨と賦税が宣武鎮に集中するのも、長安に集中するよりずっと増しだった。太原・汴梁の対抗関係が五代を開き、五代を終わらせたのである。

唐が黄巢の乱で滅亡した遠因は桂林にある。しかし実は龐勛や黄巢の蜂起には内的な連関があった。反乱軍の傭兵と違法な塩梟は、まさに唐末の軍事・財政制度の具体化であって、宋明時代の江湖社会〔黑社会、マフィア〕の出現を予言するものだった。国家が塩を独占して生まれた収益こそが国家軍隊に支給する銀両となり、国家軍隊の任務は国家による塩の独占を保証することに置かれた。塩梟は自らの傭兵を組織することができないから、国家軍隊の追及に対抗する術がない。順民の消費者は、官塩の高い独占価格を支払うことで、傭兵の武力を買い取り、軍事に服務する義務を免除される。これら三つの要因が結びつくことで、塩梟のマフィアは国家の外側にある最大の組織資源となった。動乱の時代には、これらの組織こそが天下の統治権を得る上での最大の資格を有していた。王仙之〔？〕八七八〕、黄巢から後の張士誠〔一二三二—一六七〕に至るまで、彼ら全てが塩梟であったことには、いささかの偶然もない。官僚国家が独占経済と結びつくことで、それらを転覆する江湖社会が生まれる。反乱軍や盗賊は順民社会が受け入れ不可能なルンペンプロレタリアートによって編成されており、組織資源が少しばかり他より優勢だという理由のみで天下に横行したが、そうなった原因は彼らが強大であつたからではなく、社会が離散していたからにすぎない。盗賊戦争が現れたことはバラバラの砂社会を証明するもので、前者の拡大の程度は後者の解体と正比例する。社会が解体するより前の封建システムあるいは部族組織には盗賊戦争が現れることは不可能だった。だからこそ、彼ら

は匪賊討伐の任務を担うことができたのである。春秋時代の封建に盜賊はいなかった。戦国時代の郡県には小規模な仲間の糾合だけがあった。漢と魏の宗族は大規模な盜賊を制圧する力を持ち、そうした力は隋唐時代まで維持された。則天武后と玄宗の革命以後、門閥貴族や大家族は瓦解した。こうして、沙陀人以外に龐勛や黃巢を打倒することは叶わなくなったのである。明代は、盜賊、倭寇、後金に攻撃されるや、千里の外にある西南の少数民族族長を拝み倒した。少数民族族長の持つ組織資源が秦の始皇帝以前の諸夏のようになお豊富だったからである。

李克用の軍事集団は代北〔山西省北部〕での反乱に失敗した後、帰るべき故郷のない状況に陥った。黃巢の乱によって、彼は夢にまで見た河東鎮を得たばかりでなく、叛徒の軍事リーダーから勤王の軍事リーダーへと変貌した。彼には天下を統一しようという野心はなく、さもないければ、天子を李茂貞や朱全忠の争奪に委ねるはずはなかった。彼は手順を追って太原周辺の各藩鎮を篡奪しようとし、「高山を大河で囲まれている」地政学的な完結性を回復しようとした。ところが、太行山の両側にまたがる昭義鎮が、彼との戦争の範囲を河北にまで拡大した。河東と河北の闘争が、沙陀人が関中と中原に手を染めることを押し留め、宣武鎮の傭兵に唐を篡奪して拡張する機会を与えたのである。後梁は傭兵集団と運河輸送という資源が結びついてできた産物であったから、運河輸送の資源を持たない黄河南岸の各藩鎮を征服することができた。一方で、河朔三鎮にはもともと河南を併合する意思があったのに、沙陀人の干渉によって河朔三鎮そのものの維持が難しくなったのである。河東鎮と宣武鎮の拡張はほぼ同時に進み、ほぼ同時に完成した。河東鎮は残唐における蛮族軍事集団のほとんど全てを吸収し、宣武鎮は残唐の傭兵集団のほとんど全てを吸収した。

盧龍鎮を確保した周琳と節度使の張允伸（七八五―八七二）は、政治が収束に向かう中での最後の落日の輝きであ

り、幸運なことに自己の任期中に死んだ。契丹の前線兵士は彼らのリーダー張公素を推戴し、張允伸の子である張簡会を追放した〔八七二年〕が、張仲武の捕虜であった回鶻の投降將軍、李茂勳がクーデターを發動した〔八七五年〕。李茂勳の子である李可挙は義武戦争〔光啓元年（八八五）、盧龍鎮と成徳鎮が連合して、義武鎮を滅ぼそうとしたが失敗。混乱の中、盧龍軍の李全忠が幽州を襲い、李可挙を殺害して、盧龍鎮を接収した戦い〕での失敗により、前線の將軍、李全忠〔？～八八六〕によって肅清された。李全忠父子は盧龍鎮の軍事資源を過度に搾取したため、河東鎮、成徳鎮、契丹との関係が決裂し、合わせて一族内部の政変が多発して、家族全体の滅亡を招来した。劉仁恭父子は河東鎮に支持されて盧龍を奪還したが、危険極まりない外交政策をも継承して、一方では契丹、太原、開封との三面作戦を採り、他方では家族内部に亀裂をもたらし、ついには盧龍鎮そのものを滅亡させた。河東鎮の沙陀人は盧龍の將軍たちとは不和で、そのため猛將、周德威でさえ薊〔北京〕北と冀〔河北〕東の要塞群を死守することが叶わなかった。李全忠の父子、劉仁恭の父子は残虐非道ではあったが、盧龍鎮の強力な集団の出身であったため、各地の土着豪族と阿吡の呼吸で連携し、契丹との防衛ラインの安全を少ない費用で維持し、その主力軍を中原の戦争に動員することが容易にできた。沙陀人の軍事集団は、野戦では彼らに勝ったが、在地の首領たちに包囲されれば、征服者というよりは幽州城内の囚人と変わりがなかった。土着豪族は契丹人が二重の憲制システムを推進して、彼らの権力欲を満足させようと願っていることを知ると、沙陀人という外来征服者に報復する捷徑を見つけた。幽州府は契丹遊牧軍団に包囲された孤城に落ちぶれて、開封の千里に渡る運河輸送に接続された。

これ以後、盧龍鎮、あるいは汴京の陥落は時間の問題となった。中原にクーデターが発生しなかったなら、契丹にも付け入るチャンスが巡ってきたであろう。石敬瑭〔八九二～九四二〕や宋の真宗〔在位、九九七～一〇二二〕の日

和見主義政策を非難するよりも、彼らのリアリズム外交によって少なくともとうてい逃れようのない靖康の変が起くる時間を遅らせることができたことを、後の人々は認めるべきであろう。盧龍鎮はその全期間においてマムルーク式の軍事民主制によって悪名高い。士大夫はこうした憲制のなかではせいぜいエロの役割を演じるのが関の山だと分かっていたから、この憲制に公正な評価を与えようとしなのは当然である。しかしながら、牛僧儒が指摘した事實は否定しようがない。盧龍の異民族とその豪族は彈丸が降り注ぐ場所に留まり、晋の獻公（？～六五一）と趙の武靈王（？～前二九八）以後いまだかつて誰もやったことのないことをやり、狄人傑（六三〇～七〇〇）と張九齡（六七三～七四〇）による「辺境防備に金を使わずに、軍国主義を防御する」自己欺瞞の逃避主義を撃退したのだ。軍人によって選出された節度使は傲慢ではあっても、その節度使統治の最大の受益者は朝廷と庶民に他ならなかった。ところが、官僚国家や士大夫参謀は辺境の統帥権を回収するや、日夜皇室と民衆を守ることを神に誓ってきた彼らに早速最大の恥辱と災難をもたらしたのである。「雅楽の編鐘は駐屯兵のいる市場を満たし」、「白粉を塗った女たちが泣きながら回鶻の指図に従い」（元好問「山居雜記二首」其一）と描かれるような悲惨な場面で、李清照（一一〇八四～一一五三）やその同輩が封建貴族の模範であった項羽（前二三三～前二〇二）を懐かしむことは完全に正しいし、一度は消滅させる決心をした安史の殘党を懐かしむことはもっと正しかった。こうして蛮族の騎士は、この地で大切に保管される「東京〔南京〕の夢の榮華」や「武林の旧事」の語り部に成り下がり、身の丈にあった虚名だけを得た。

汴梁と太原の二極の間の闘争が激しさを増すと、成徳鎮や魏博鎮の歴史も憲制も行き着くところまで行ってしまう。宣武鎮は河北を併呑しようとした結果、それが裏目に出て、かえって成徳幕府を沙陀人の懷へと送り込んでしまった。これ以後、河北の回鶻軍事集団は歴史から消えた。羅紹威（八七七～九一〇）は宣武鎮の力に頼って、諸患

の根源である魏府の特別親衛隊を肅清した。しかしながら、特別親衛隊を欠く魏博鎮など魏博鎮の体をなすはずがない。唐の中期から天下にその名を轟かせた鄴〔河南省安陽市〕の軍隊はこうして一撃のもとに肅清され、地政学的な政治版図に不気味な空白だけが残り、汴梁は丸裸で河東鎮と河北鎮の沙陀人の目の前に晒された。朱全忠は、趙と魏の二つの藩鎮を必ずしも彼の本意ではないにしても一応保護下に置いたので、沙陀人の存在を無視して、閼隴と淮南を好きだけ攻撃できた。彼による河北での勢力伸張は、むしろ自らの安全保障を破壊するもので、彼の継承者は黄河を挟んだ苦しい戦争という最悪の事態に直面することになり、汴梁を河東鎮の爪牙のもとに捨て去ることになった。最後に、鬭争する両者はいずれも契丹の仲裁を乞わざるを得なくなった。この間、河東〔太原〕の沙陀人はしだいに諸夏と契丹の緩衝国へと退化していった。後周や趙氏の宋室は「守備は四方の夷狄にあり」という古来の戦略に違反し、徹底的に半蛮族の軍事集団を消滅させ、契丹人の前に自分をさらけ出すことになった。軍事が財政を動かし、財政が憲制を動かし、憲制が思想を動かす。東アジア近世の基本的な構図は宋代に固まったが、その伏線は残唐五代の蛮族交代問題のなかにあった。

淮南節度使の高駢（？～八八七）は揚州塩と運輸の巨大な利得を独占しようと企み、各將軍や盜賊を巻き込んだ狂気の鬭争を惹起した。楊氏〔呉を建国した氏族〕は彼らの戦いの廢墟を接收し、清口〔江蘇省淮安市〕にて虚に乗じて侵略してきた宣武軍を打ち破った。南方の各国はこれ以後、世界帝国を資金援助するという重い負担から解放され、自らの多国システムを思うままに発展させた。楊氏の呉が率先して、境界を守り民衆を保護する原則に基づいた範を示し、コンスタンチノープル再建という亡命王朝の誘惑を拒絶した。広陵〔江蘇省揚州市〕は隋唐時代の江南の首府であり、淮南は帝国の財政の中樞であった。揚子江上流に進出するのも、その東岸を開発するのも、楊氏にとつ

てはいずれも極めて容易だったが、むしろ各藩鎮を相互承認する政策の方を選んで、効果的に南方の戦火を終わらせようとした。淮南は戦わずして江西を接収し、秦宗權や孫儒の残党を追跡する湖南戦争（九四七―五一）を進んで放棄し、双方が受け入れられる条件下で呉越の国境紛争を解決した。淮南が保証した平和は南方経済の繁栄の基礎を確立し、その遺産は宋・元・明・清の四つの王朝を維持するための帝国の出費に耐えるものだった。春秋時代の列国に始まる東アジア国際システムの文明のなかで、この十国ほど高度なレベルに到達できたものは稀である。北方の蛮族と傭兵が競って帝国の猿真似をして、周公と孔子の故郷をほしきままに蹂躪せざるを得なかったことと、南方の各国による共存共栄とは鮮明なコントラストをなしている。

南唐が呉に代わったことで、多国システムの良性発展は転機を迎え、久しく隠れていた帝国の呪詛が復活する。揚州は経済と文化の首府であり、地政学的には防衛に適していないが、野心なき方鎮たるには適していた。金陵〔南京〕は群雄がひしめく軍事要塞であり、東アジア世界のコンスタンチノープルの記憶が凝集されていた。李氏が金陵に遷都し、唐室を自称した（九三七年、徐知誥は唐を建国、李姓を名乗った）のは、北方の帝国戦争を南方に導入する用意があることを示唆していた。南唐は国家の相互承認の原則を放棄し、楚国と閩国に干渉し、南方の黄金時代を終焉させた。南唐は自らが始めたゲームで最大の損失を被り、国家の基幹である淮南を喪失した。閩と楚の看板を得ただけでは、その損失を償うには遠く及ばず、楊氏の注意深さがいかに貴重であったかを逆の面から証明することになった。金陵政権は、楊炎（七二七―八一）や楊行密（八五二―九〇五）には自明であった論理に気付かなかったようである。淮河上流の安全を確保してはじめて、揚州の貿易センターとしての地位が不動のものになるのであって、江西諸州の農業から得られる富など取るに足らないということを。湖南の茶葉の輸出と食塩の輸入は揚州が管理する

河港を経由せざるを得ず、その利益のほとんどは淮南の国境内に集約されるのが必定である。清口の戦いの後、淮南は唐代に長安、汴梁、揚州が享受した利益を独占した。情勢はさらに淮南に有利であり、いかなる領土の書き換えの試みも淮南の現状に損害を与えこそすれ、改善するものではなかった。唐の軍隊が楚を滅ばせば、戦争にかかる支出と損失を勘定に入れなくても、貿易ルートやそこから得られる歳入は増えない一方で、亡命官僚、国境警備兵、湘西の蛮族平定戦争の支出の方が増えてしまうだろう。潭州（湖南省長沙市）や朗州（湖南省常德市）の政権が足元を強化すれば、土着豪族に諸費用の更なる負担を求めるだろうから、かかる経費はもつと安くて済む。金陵の拡張主義への転換は、杭州、荊州（湖北省荊州市）、朗州の各藩鎮を汴梁に向かわせ、金陵はその周りを包囲されてしまつて、寿陽（安徽省淮南市）で清口の勝利を再現することが不可能になった。劉仁瞻（九〇〇～五七）の淮南における敗走（九五七年）は、寿陽の要塞によつてしか呉越と南漢の安全は保たれないという意味では、南方十国全体の敗北に他ならなかった。金陵が投降して、「人民の膏脂を搾り取られる」運命は「江南四十三州」の頭上に降りかかった。

呉越は杭州、越州（浙江省紹興市）の二藩鎮が合併して生まれたもので、在地の土着集団が黄巢の侵略に反撃した戦争の産物である。銭氏が董氏に取つて代わつたのは、国境防衛と民衆安堵の政策が天下争奪の政策に代わつたことを意味した。杭州は金銭外交を展開し、定期的に長安、洛陽、汴梁の各朝廷と契丹宮廷に資金援助と賄賂提供を行い、巨人をうまくあしらつて淮南に隣接し、閩と越の境界や蘇州と常州の境界を沈静化した。銭王による両浙水利事業への細やかな配慮は、後続する諸帝国のいずれも遠く及ばないもので、晚期帝国を支える郷紳集団を育んだ。銭氏の成功があまりにも大きかったので、この地方のエリートは農業財政方面に注目するばかりで、閩や南漢（広東）のように海上貿易を重視することなく、多くのチャンスを失うことになった。閩国政権は北方難民の後裔であり、山地

開拓による収益は望むべくもなく、海上に進出することを余儀なくされた。安南の事大主義と孤立主義を結びつけたような外交政策によって、彼らは漳州やマカオの海港、そしてその山岳障壁の安全を保障しなければならなかった。彼らが致命的な内戦を回避できたなら、宋人は安南を軽視したようには、この地の存在を忘れることはなかっただろうが、歴史は呉越にそのような機会を与えることがなかった。内戦により南唐と呉越はメロンのように分割された。この二大国の投降によって、その保護する土地が北方亡命官僚の統治下に自動的に編入された。

南漢は南朝、隋唐より引き継がれた広州によるインド洋・南洋貿易システムを継承し、所属各州の農業収入に大きく依存することがなかったから、内地の士大夫の伝統や官僚国家の倫理原則をととても軽んじた。広州の宮廷には妖しい異国情緒が瀰漫し、少数の宮廷、軍隊、商業団体のメンバーが貿易利益を分け取りして、圧倒的多数の後進文化民衆の存在を無視した。広州はもつと言えば、好きな時に財宝を分捕って逃亡できる植民地貿易拠点のようなもので、地方に対する責任感を欠いていた。潘美（九二五〜九一）の軍隊の迅速な行動があったから、彼らの海外逃亡はようやく阻止できたのである。宋人の征服によって、この嫌悪すべき劉氏宮廷は取り除かれたが、錯綜した種族団体にいつてはどうすることもできなかった。土着豪族の周思瓊や麦漢瓊の反乱（九七〇年）は失敗したが、官僚国家の建設は依然として困難を極めた。王安石（一一〇二〜八六）の時代になっても、当地でなされる科挙はまだ申し訳程度のものだった。応募者の数では定員が埋められず、試験は最低限の合格基準を保つことができなかった。各州は朝廷をごまかすために、社会的名士の子弟で欠員を補充するしかなかった。これら子弟の儒学のレベルでは首都での交流や仕官などというに叶わず、賞与を受け取って実家に帰ることで満足せねばならなかった。宋軍はここから速やかに撤退し、より危険な河東、河北の戦場に投入されたから、儒教化の程度が南漢よりも高かった安南を忘れてしまった。

静海軍〔ベトナム〕は唐の重臣、高駢が精魂込めて経営した基地であり、南詔の侵略を退けることに何度も成功した。黄巢の乱の後、曲承裕〔？～九〇七〕の幕府は不本意ながら唐室を離れた。そのかつての將軍である呉氏は南漢による併合の企てを挫折させたが、各地の土着豪族を抑えることはできなかった。十二使君の乱〔九六五～六七七年〕は残唐が残した幕府をそっくり瓦解させ、越南デイン氏の土着豪族連合政権が誕生した。ホアルーの宮廷は開封に対して臣下の札を取り、交趾郡と安南都護の肩書きを得た。宋人が唐代の安南節度使を回復する意思をもたなかったことがここから分かる。宋は同様に、唐代の朔方軍の生き残り——未来の西夏を編入する意思もなかった。

荆南〔湖北〕の高氏は後梁の方鎮に始まり、勢力均衡の外交政策によって沙陀人の征服は免れたものの、藩鎮という構造自体を離れることはなかった。潭州の馬氏は盜賊集団の殘党で、軍事征服という色彩が強烈であった。彼らは淮南の匪賊掃討軍の追撃は阻止できたが、長期にわたる蛮族平定戦争を脱れることはできなかった。蛮族平定戦争の前線である朗州は、潭州を上回る軍事資源を蓄積するや、ついに幕府とその蛮族軍人による大後方に向けた征服阻止の戦いを始めた。内戦は金陵の干渉を招き、潭州は国内外の各方面からの蹂躪を被った。戦後の朗州幕府にはもはや宮廷を再建する力はなく、汴京の方鎮の身分を回復できにすぎない。巴蜀の地方勢力は劣勢が続き、土着政権を誕生させることはなかった。前蜀が長安朝廷の代理人であり、後蜀が洛陽朝廷の代理人であった。彼らの独立は朝廷が瓦解した結果であり、独立は外部からの軍事統治という性格を変えなかったから、再び征服されればそれに抗する力はなかった。二つの蜀が残した主な遺産は、大渡河の境界を確定し、長期にわたった唐と異民族の戦争を終結させたことであろう。宋人は巴蜀の平和を引き継いで、川峡四路〔益州路、梓州路、利州路、夔州路〕の軍事ランクと俸給レベルを下げたため、金や元との戦争における防御に禍根を残した。そのため、巴蜀は宋の西軍と汴京・湖南の援軍

に大々的に依存することになった。大理は南詔に取って代わってから、西周によく似た封建システムを打ち立て、戦争の危険はこれによって急減した。段氏が周の天子の役割を負い、政治と祭祀の分業体制を敷いた。段氏は君主に対して春秋時代のような忠誠と名誉意識を持ち、それは彼らがモンゴル戦争において主君を守って、殉死するまで続いた。

4. 東アジア世界システム

晩期東アジア帝国の状況は秦漢世界帝国とは違った。後者はローマがギリシャを継承したように、華夏の各国家を継承して、国境外にあるのは異質な文明もしくは野蛮な部族集団にすぎなかった。前者はそれ自身が体内に寄生した野蛮な部族集団から生まれたものであり、国境外には同じような一連の小国家が存在し、異質な文明もしくは野蛮な部族集団の方が数においてはつきりと勝っていたわけではなかった。韓半島の前後にわたる三国時代〔辰韓・弁韓・馬韓、高句麗・新羅・百濟〕には、渤海、契丹、日本、南詔・大理、安南、西夏が相次いで誕生し、もう一つの世界システムを形成して、春秋時代のような多国システムと秦漢世界帝国の間に介在した。六朝時代の始め〔五世紀〕、高句麗が北燕〔遼寧に建国、四〇七―三六〕が滅亡した空白地帯を埋めた。南朝―百濟―日本が建康の統治に服する海上朝貢同盟を形成し、新羅を包囲し、侵略していった。六朝の末〔六世紀後半〕になると、高句麗が渤海、黄海、日本海の間に横たわる広大な土地を併合した。北朝と新羅は朝貢同盟を結成して、東北地方における好戦強国である高句麗の興起を妨げようとした。二回にわたる高句麗戦争〔六四三年、六四八年〕は大運河の改築と府兵制の滅亡をも

たらし、ついに華北は蛮族軍隊の蹂躪にさらされ、華南は朝廷と禁軍を防衛する大きな負担を強いられた。高句麗の淵蓋蘇文〔六四二年、唐・新羅連合軍を撃破〕も、自分の死後になされたこのような徹底的な復讐に満足したに違いない。これらに比べれば、隋の煬帝の暗殺という悲劇は取るに足らないエピソードである。高句麗の亡命者が北方に渤海という大国を建て、外見は立派だが中身のない唐の玄宗朝廷〔七一二～五六〕に深刻な脅威を与えた。契丹やその同盟国が遼東半島西部に勃興すると、唐は韓半島の占領を維持することができなくなった。異民族の盛衰の相互関係性は、その実、システムなき国際システムの培養基であり、多国システムは、この培養基における秩序の現出を意味する。世界帝国は、晚期文明が自らの秩序を破壊してゆく消費者に他ならず、システムなき権力の復活と文明の衰退を加速するばかりだった。

原始文明は青春期に突入すると、まず必ずと言って良いほど、多国システムを形成する。第二期文明が、死細胞の中に残留した阻害物質の遊離基質複合体（医学で言う腫瘍）を適切に変化させなければ、その青春期に衰亡期を現出させた基質複合体に含まれる表徴が早期文明に特有のエネルギーとチャンスを喪失させる。朝貢システムは晩期世界帝国のイデオロギが蛮族の多国システムに侵入して起こる症状だから、多国システムの方が朝貢システムの腐敗と衰亡を一足先に再演してしまう。世界帝国のディスクールでは、こうした現象を同化と呼ぶ。没落文明は同化主義を誇示し、その誇示は春秋時代の先祖たちが植民地主義を誇示したよりも赤裸々である。遊離基質複合体は永続的なものでも、ましてや克服不可能なものでもない。なぜなら、その転移（前の宿主から別の宿主への侵入）の度毎に基質複合体の一部が失われ、あるいは交代し、新しい宿主もそれまでの宿主よりは遊離基質複合体が共同で生み出すに至った原始文明体からは遠ざかっているためである。このため、同化―早期衰退のサイクルは後になればなるほど短くな

るのが普通である。遊離基質複合体は最後には完全に分解してバラバラとなり、腫瘍の形式で体外に生存するチャンスを失い、ピラミッドのような装飾品のかたちで、全く異質の細胞のなかに散りばめられる。人類の大部分の基質複合体はこのような断片から成るが、こうした断片は宿主をコントロールしたり、複合体を離れて転移する能力を失っているために、宿主はそれらが腫瘍であることを忘れて、自分のサブシステムであるとか服務者であると考えようになる。エジプト文明はその春秋あるいは州国の時代〔古王国・中王国〕に、システムなき蛮族の海洋を少数文明人である彼らの植民対象とした。ファラオがその戦国期に継承された組織資源を費消しながら、帝国の短い栄華を購った。民衆搾取によって保たれてきた帝国モデルは、リビアやヌビアなどの蛮族に感染し、彼らを誘惑してファラオの継承者を僭称させたが、ペルシャ人、ギリシャ人の基質複合体では、それらは二次的に服務するだけのサブシステムになり、ローマ人、キリスト教世界、アラブ・ムスリム世界の基質複合体では受動的な装飾品の役割を果たしたにすぎない。

鮮卑人〔唐を建国〕や氐人〔五胡十六国の中、成漢、前漢、後涼を建国〕は最初の宿主の役割を演じ、符堅〔三三七～三八五〕や北魏の孝文帝〔四六七～四九四〕、唐の太宗は自らの青年時代あるいは黄金時代を犠牲にすることを代償に、自己と世界にこの役割を認めさせることに成功し、回鶻人、突厥人、沙陀人をヌビア人の道へと引き入れた。唐の玄宗にとって、蛮族の傭兵を用いる以外に蛮族の部族集団に対抗することができないのは明白であって、だからこそ、河朔にあった藩鎮は隠然たる敵と言えた。西北の蛮族以外に東北の藩鎮に対抗することはできなかった。王忠嗣〔七〇五～四九四〕、四節度使を兼ねる、安史の乱を予言〕が治める河東鎮は次々と李光弼や李克用の手に落ちた。沙陀人は盧龍鎮の防御システムを崩壊させ、契丹人を解放した。契丹の遼人が燕雲十六州を手に入れたやり方は、沙

阼人が河東鎮を手に入れたやり方とほとんど大差がない。養子・親衛隊の文化は残唐期の藩鎮においてはごく普通のことであった。遼人のやり方がそれらと異なるのは、世界帝国の基質複合体をコントロールするレベルを下げた点にあった。朔方鎮、河朔鎮、河東鎮などに依拠した蛮族武士団には決してできなかったことである。新しい宿主は官僚国家の原則を部分的には受け入れたが、自らの出自、言語、文化の伝統を進んで消滅させることは拒絶し、むしろ順民社会の士大夫たちに蛮族である彼らの優越性を認めるように迫った。蛮族たちが持っていた組織資源は六朝の士族にとうてい比肩できるものではなく、基本的に選択の余地などなかったにもかかわらず、そうしたのである。婚姻とはそもそも階級の試金石である。北魏の孝文帝や唐の太宗が婚姻をつうじて王・謝・崔・盧という閥隴家族の純潔血統を自らの血に混入させるチャンスがあったならば、征服よりもっと大きな達成感を得たであろう。貴族集団が礼儀風習や家門伝統を取引の材料にするのは、大きな見返りを得るためであるのが普通だった。遼・金・元・清の子孫たちが被征服者の血統を混在させたのは、多くの場合、戦争の残酷さと奴隷の献上の結果であった。

五京体制（渤海、遼、金で行われた行政制度）は唐の太宗・天可汗（テンカガン）二重体制を受け継ぎ、金・元・清の多元的君主推戴政体、すなわち、軍事義務は部族集団の武士が請け負い、財政義務は郡県の順民が請け負い、これらは互いに干渉せず、共同の忠誠対象である皇室だけを接点に持つ政体を予見するものである。君主推戴政体の多元性が強いほど、相互に制限し合う安定性も強くなる。単純な二元構造ではすぐに蛮族武士が順民を略奪したり、士大夫がこれら部族集団を骨抜きにすることになり、この二つが同時に起こることも稀ではない。部族集団の武士団と順民がどちらも多様なエスニティーで構成されており、親疎に違いがある差序構造をなしていれば、ローマ帝国のような位階秩序と相互連結を生み出すことができる。遼人には契丹・奚の武士同盟ならびに燕雲・渤海・高麗の士大夫

同盟があつた。金人には女真・渤海の貴族共同体ならびに契丹・南人（漢民族）の士大夫同盟があつた。元人には種族封建制と行省制度（行中書省の略、中国元代の官制に特有な中央の出先機関）があつた。清人には満州族・モンゴル族の武士同盟、満州族・モンゴル族・チベット族の宗教同盟、一八省と回疆・苗疆の降伏部族集団があつた。多元的な君主推戴政体は匈奴人のような失敗をもたらすことはなく、鮮卑人のように漢魏の君統に従属することもなく、民族・文化の核心を維持しながら、漢民族の正統君主としても君臨できた。こうした政体こそ南朝が恐れた悪夢に他ならない。事実、無限の同化能力の神話はそうした同化能力が破綻した際に作られるものなのだ。真の同化能力を持った六朝の門閥貴族は決して同化を熱心に説いて回つたのではなく、礼儀風習や家門伝統の独自性を保全することに努めたのである。同化が情勢の変化に迫られてなされる一時的な方便であることを彼らは知っており、自分の価値を貶めるのは賢明な策ではないと分かっていた。燕京の大家族は遼の朝廷に迫られても、山東士族が唐室に対して取つた傲慢な態度を示すことはなかった。彼らの郷兵や渤海人の郷兵は金人に迫られても、戦闘に打って出ようとしたことはなかったのに、宋人の正規軍が来るや異常な抵抗力を発揮した。西部の属国軍や部族集団の軍隊は原始的な生活様式をかなり保っていたから、金人に抵抗する能力はとても高かった。遼人が各軍の独立した動機付けを保てたのは、憲制のバランスを重視したからだ、戦略上の合理性への注意は十分でなかった。そのため、予想外の損害を受けることになったのである。

契丹人が唐室を遼東半島と韓半島から追い出したことは、東北地域に国際システムが復活する機会を与えることになった。日本は渤海と新羅を朝貢国とする衝動に駆られたが、日本が実現できることには限界があつた。渤海人は、高句麗による帝国主義の伝統と海東（日本）新興国による植民地主義の現実のいずれを採るかを決めることができない

いまま、突破のチャンスをあつという間に逃した。遼人が渤海を征服し〔九二六年〕、宋人と高句麗を継いだ高麗が価値観において同盟することを粉砕したため、日本は国際社会における孤立という冷酷な現実と直面したが、武家の封建主義はそれによってかえって完成に近づいた。それは、ジャンヌ・ダルクの〔百年戦争での〕勝利がイギリスに持った意味と軌を一にするものである。日本人は孤立主義の勝利を「元寇」を打ち破った神風の功に帰したが。人は誰しも原因よりは結果に注目したがるからである。律令制帝国は中国の天朝意識とその内的構造において同じである。朝貢システムは天朝の学習を終える際の卒業口頭試問の儀式である。寄生虫である官僚国家は、こうしたイデオロギーの助けをもつとも必要としており、それらが消え去ることを決して望まない。京都の帝国システムが、朝貢システムと共に破産したのは、関東の植民地開拓が封建主義と共に展開したのと符節を合わせていた。源平戦争はゲルマン民族による西ローマ帝国の征服の縮約版であり、鎌倉幕府と京都公家がそれぞれ神聖ローマ帝国とローマ・カトリック教会の役回りを演じた。しかしながら、真の生命力はこの二つの極の外側にある藩国〔所領〕と武士団にあった。日本は大陸からの贈り物である官僚国家を捨て去り、子供が老人におんぶされるのを振り切るように、青春の時代である封建時代へと歩を進めた。内陸アジアの各部族集団は、これとは正反対の選択を行い、早熟と老衰を早める歴史の実験室に入っていた。

遼人は北朝がその治世の後期に放棄した遼東半島と鎮州〔北モンゴル族のケレイトの故地、今のウランバートルの西、遼は一〇〇四年、エレイト統治のため、ここに建安軍を設置〕の防衛システムを復活し、北魏と唐代における内陸アジアのミッションを大々的に拡充した。耶律大石の逃亡〔一一三二年〕よりもずっと早く、遼人は北方地域の支配者である権利を行使したから、契丹あるいは震旦の名称が東ヨーロッパや西アジアに伝播した。その後で、官僚国

家の呪いが予告通りにやってきた。澶淵の盟（一一〇〇四年）によってもたらされた銀や絹は、上流社会の機能を腐食させる役割を果たすばかりで、朝廷を真の意味で助けることはなかった。燕雲が国家の根本であるという道統意識に従うなら、漢の文帝による賦役軽減政策を見習うべきであった。言い換えれば、遼人は榆関（山海関）の北側の開墾植民から得られる利益によって歳入の損失を補うべきであった。上京臨潢府（内モンゴル自治区赤峰市）の管轄する地域の開墾植民が遼朝廷の安全保障の脅威となったことは、滿蒙の開墾植民が愛新覺羅の家族の退路を絶ったことに匹敵する。金人が松花江から上京臨潢府にいたる戦闘をいとも容易く敢行できたのは、契丹の故地にいた部族集団の伝統が衰退して久しかったことを示すものである。天祚帝（遼朝最後の皇帝、一〇七五―一二二五）、耶律大石（一〇九四―一一四三）、「遼朝の高級官僚であった」蕭氏はみな最後の希望を複数の種族が混在した陰山山脈の部族集団に託したが、ここはかつて朔方鎮節度使の後背軍事基地であった。遼人の属国と部族集団は、漠北（ゴビ砂漠の北側、今のモンゴル国）と漠南（ゴビ砂漠の南側、今の中華人民共和國内モンゴル自治区）の間にあって、東西に長く続く緩衝地帯と武士のための貯水池を形成していた。最後の反撃が失敗に終わった後、耶律大石は鎮州の軍隊全部を引き連れて敗走した。北魏の六鎮以来、代北、漠南がこのときほど空っぽになったことはなかった。ただし、金人の遠征は遼朝廷の残存部隊に対するものに限られ、遼人の西側の領域を継承するものではなかった。夾谷清臣（一一三三―一二〇二）の北アジア遠征（一一九五年）は韃靼連盟を破壊するという消極的な目標を掲げたにすぎず、ほんの申し訳程度のものでしかなかった。金人の内陸アジア政策は彼らが征服した宋人のそれに酷似しており、北魏、唐

7 金朝の宰相で、モンゴル征伐の軍隊を指揮した。

人、遼人の軍事伝統を継承するものではなかった。周期的に行われた兵隊募集は漠北の過剰な騎士集団を吸収した。漠南の漠北に対する優位は、傭兵と金・絹貿易の中心地域であったことに基づいていたから、朔方基地が滅亡すると共に終結した。漠北を圧していた圧力が解放されるや、南北の差序はあつという間に逆転した。

西夏が瓜州〔甘肃省酒泉市〕、沙州〔甘肃省敦煌市〕を征服したのは、于闐国〔前三世紀―一世紀〕が滅びたのとは同じ時期であつた。西州の回鶻とカラハン朝〔九四〇頃―一一三二〕のムスリムの間には衝突が絶えず、南路の貿易ネットワークは切断され、鎮州・東ヨーロッパ回廊の重要性が増した。この後、千年にわたつて、洛陽から西のアジア内陸部はますます荒廢の度を強めた。河西回廊は後漢の經学の六朝時代における主な避難所であり、李氏唐王朝による統一戦線の対象であつたが、今や回鶻、吐蕃の部族集団が互いに争う文化の果てた地となつた。靈州〔寧夏ウイグル自治区銀川市〕は南朝の呉明徹〔五一二―七八〕の部隊が集団移住させられた要塞内の江南であつたが、もはや西夏の燕雲十六州となるには程遠かつた。朔方鎮の軍隊の残存部隊がこのような広大な領地を占拠しても、それで貨幣収入が手に入る訳でもなかつた。毎年宋から献上される賠償金は遼人のお飾りにすぎなかつたが、西夏にとっては生命線であつた。宋の汴京朝廷が、この取るに足らぬ支出と、やはり愚にもつかない国境紛争のために払つた代償は、河東鎮や燕雲十六州をはるかに超えるものである。王安石の新法派政府は西夏を側面攻撃するために、さらに悲惨な河湟戦争〔一〇七二―一〇三年〕を引き起こした。この西北戦争は北宋の党争を激化させたばかりではなく、宋金戦争に関して、馬鹿げた、しかし公正なる結果をもたらした。澶淵の盟は宋人の勝利と言ふべきもののな

8 南北朝時代、南の陳朝は呉明徹を北伐に派遣し、失敗に終わった。その後、北周は陳の軍隊の捕虜を靈州に移住させ、かくて「揚子江左岸の人々は、礼を尊び学を好んで、習俗も感化されたために、塞北の江南と呼ばれた。」

に、意外にも河北防御システムの弛緩をもたらした。西北戦争で宋人は敗北したはずなのに、かえって種氏兄弟と呉氏兄弟の擁する西軍を育て維持した。青唐羌〔チベット族、吐蕃滅亡後に活躍〕はこの西北戦争の後に遼と西夏に取って代わり、宋人に馬匹を提供し、ために西軍の重要性はより増大した。北宋と南宋が戦禍に右往左往した際、南朝の軍事伝統はほとんど西軍によってのみ維持されていたと言っても過言ではない。

王安石の変法は神宗朝廷（一〇六七～八五）が漢の武帝（前一五六～前八七）や桑弘羊（前一五三～前八〇）を自己流に模倣したもので、辺境開発と苛斂誅求という方向を基本とすることを初めから何ら隠してはいなかった。王安石が失敗したのは、政策そのものに弱点があったからではなく、宋人にはそもそも継承すべき戦争の遺産などなかったからである。北方にいた遼の多元的な君主推戴政体は郡県制の収奪マシーンと蛮族の軍勢力を結び付けて、やすやすと王安石の推進する新政を捻り潰した。王安石は西南夷を開拓し、朝廷に富国強兵が実現できるのではという幻想を与えた。湘州（湖南省長沙市）、沅州（湖南省懷化市）の酋長はこれまでずっと馬氏政權の投降勧告に抗してきたが、ついに章惇（一一〇三五～一一〇五）の経略の前に屈した。南江蛮、北江蛮と梅山蛮は「田畑を区切り、郷里を並べ」て、帝国の戸籍民に編入された。沈起（二〇一七～八八）や劉彝（二〇二九～八六）は章惇の功業の分け前に与ろうと、王安石に安南を辺境開拓の工程に入れるよう説いて回った。安南は機先を制して、この戦争を変法派に反対する党争に変えようと企てた。「宋の君主は頑迷で、皇帝の典範に従わず、安石の邪悪な詭計を許し、青苗・募役を科し、民衆を塗炭の苦しみに喘がせ、自らを利する謀りごとの助けとした。その才能を天から授かった万民が、突

如かの危険な害毒に身を落とし、上位にある者はまだ良いとして、憐れむべきは、これまで万民が受けた筆舌に尽し難き苦しみである。わたしリ・トゥオン・キエット（一〇三〇―一〇五）は国王の命を奉じ、北へと進軍して、波立つ妖怪どもを肅清せんとする。¹⁰ こうした希望が出されるにはそれ相応の根拠があり、保守党が河湟戦争と交趾戦争（一〇七五―七七年）を新党の悪意ある陰謀と見たのは確かである。¹¹ 神宗はそれらの戦争によって唐代の国境を回復しようと望み、郭達（一〇二二―八八）に「内地に準じて州県を置く」ことを命じた。¹² 王安石も交趾戦争の勝利が西夏を震撼させることを望んだ。¹³ けれども、疫病の流行は宋軍の主力部隊を壊滅させた。¹⁴ 郭達は「わが一身を犠牲にすることで十余万人の命を救いたい」旨を述べ、汴京の君臣たちの願いを断念させた。¹⁵ こうして、交趾は南越の運命を免れた。熙寧朝廷（一〇六八―七七）は交趾を放棄したばかりか、チャンパを利用して交趾を牽制する戦略をも放棄し、チャンパと海南島の貿易までも中止するに至った。

10 『宋の征伐の布告』。

11 司馬光『涑水記聞』に「熙寧年間（一〇六八―七七）に、朝廷は沈起、劉彝を派遣して、続けて桂州を統治させ、交趾の征服を試みさせた。二人は戦船を作り、トン族の成年男子を集めて民間自衛団を組織し、戦術図を与えて、それによって戦わせたので、トン族の人々は騒然となった」とある。また、李燾『続資治通鑑長編』卷三八〇、元祐元年（一〇八六年）丙寅にも「霊夏の戦役は、わたしが起こしたもので、そこで開拓した新たな要塞は、彼らの田地であった」とある。

12 前掲『続資治通鑑長編』卷二七三、熙寧九年（一〇七六年）二月甲寅。

13 同『続資治通鑑長編』卷二七六、熙寧九年六月丁亥。

14 彭百川『太資土跡統類』卷一七。

15 『宋史・郭達伝』。

西夏戦争の敗北と王安石の失脚によって、辺境開拓の政策は最終的に破綻した。元祐（一一〇八七～九四）の党人は漢代儒者が秦の始皇帝や漢の武帝を譴責した理論によって西夏戦争を総括した。新党は哲宗の時代（一一〇八五～一一〇〇）に巻き返しを図り、横山戦争と天都山戦争（一一〇九八～一一二七年）を再び発動させた。哲宗が逝去して、西軍も章惇も勢力を失った。蔡京（一一〇四七～一一二六）が復活し、西軍は再び、童貫（一一〇五四～一一二六）の庇護のもと発言権を拡大した。宣和の天子（徽宗、在位、一一〇〇～一二六）は「富貴かつ太平」をもたらす財政拡張主義に基づき、宋と金の海上同盟を支持したが、西軍による燕雲の戦役は靖康の大難を招いてしまった。宋人の議論が定まらない中、金人の軍隊は黄河を突破した。論争の双方とも、宋と金の戦争は宋と西夏の戦争の翻案にすぎないという点では一致していた。西軍が成功しようと失敗しようと、汴京の党争に少しばかり新しい論点を加えるにすぎなかった。長い争いの中で、新党の国家社会主義は軍国主義と表裏一体のものとなり、旧党の財政保守主義の方も国際協調主義と一体化した。青苗銭の大部分は新党がその実現を確約した農村建設には回されず、戦争経費に補填された。前線は河湟から陝北へと伸び切り、朝廷は年間五〇〇万貫を浪費し、その支出の四分の三が新法の搾取によって得た財政補填を頼りにしていた。辺境では人家もまばらになり、米の価格は内地の一〇倍に跳ね上がった¹⁶。傭兵では蛮族に勝利できる見込みはなく、蛮族より金がかかるだけだった。元祐の党人は搾取の度合いを減らしはしたが、財政収支を均衡化はできなかった。結局のところ、戦争遂行能力を決めるのは民衆の道德と民衆の実情である。新党も旧党も、とうてい突破できない歴史の破局に直面せざるを得なかった。司馬光（一一〇一九～八六）が認めたよう

16 曹瑞竜「妥協譲歩から領土拡張へ——宋の哲宗朝の西夏政策の変化と軍事戦略の相互補完性」〔『台大歴史学報』第二八期、二〇〇一年十二月〕。

に、「農民と商人は戦闘に習熟していない」のだった。¹⁷ 項羽なき時代にあつて、「尊皇攘夷」のスローガンは士大夫の集団の中だけで文化宣伝の役割を果たすに留まった。

同じ現実から全く違つた結論を引き出すこともできる。鍵となるのは政策決定者の価値観である。王安石の仲間たちは表では三代を讃え、裏では漢と唐の功業に憧れていた。彼らには次のことが明らかだった。秦漢の民兵は春秋時代の武士の末裔であり、隋唐の府兵は北朝部族の後裔である。彼らはここから次のように結論付けた。順民に戦闘能力がないなら、たくさんお金を出して傭兵の戦闘力を買ひ取れば良いのだ。朝廷は、これ以外に一統をたつとぶ方法を持つていない。彼らは辺境の全てをたんなる駆け引きの道具と考えるだけで、条約を破棄しても恬として恥なかつた。¹⁸ 熙河戦争〔河湟戦争〕は来たるべき燕雲戦争の予行演習であり、北伐は世界帝国を回復するのになくはなら

17 『宋史紀事本末』巻三五。

18 蘇軾『熙河の辺境事件を再論する上書』にこうある。「かつて先帝が熙河を開かれた際は、蘭州がなくとも、それが不都合だとは思われませんでした。李憲が命令に背き、この城を建ててから、蘭州がなければ、熙河を防衛できないことを理由に蘭州を占領し、それから十余年が経ちました。現在、質孤、勝如に築城し、夏国の豊かな田地を占領しようと考え、質孤、勝如がなければ、蘭州を防衛できないと言うに至りましたが、次々と面倒を起こすのは、全ていい加減な発言に依っているからです。わたしが考えますに、辺境防備が平穩であれば、將軍も官吏も安心しておられますので、面倒を起こさない限り、爵位や賞与を要求することができません。これが辺境を防衛する人々が普段考えることで、古くからずっとある弊害なのです。このことを突き詰めて問えば、相手の論理は行き詰つてしまふでしょう。」また、蘇軾『蘭州などの土地を論ずる状』にも、こうある。「辺境の人々は怒り、天下は悲嘆に暮れ、世の中を崩壊させようとすれば、立ち所にできるような状況にあります。なぜ、こう申し上げるかと言えば、誤りが朝廷の側にあり、出兵をどうあつてもやらねばならないものではないと理解するからです。現在、どうあつても相手の土地を侵して、相手の要求に全く耳を傾けようとしなければ、正義に背いているとい

ない手続きだった。旧党が「王者は夷狄を統治しない」という理論を発明したのも、一統をたつとび、文化と種族の違いによって人為では覆せない境界を設けるといふ高く付く考え方を遠回しに放棄することを準備するためだった。蘇軾は古代の辺境を回復すべきだという年寄りの決まり文句をあざ笑って、唐代の安西都護府も一緒に回復してどうかと提案した。蘇軾たちは条約システムの合法性、さらには永続性を承認した。彼らは夷狄にも誠意と信義をもつて対処せねばならないと考えた。朝廷が仁政の基準を踏みにじったならば、勝利もまた犯罪にすぎないと。『資治通鑑』〔卷第五八〕は後漢の將軍、段熲（？～一七九）が羌人を虐殺した暴行を厳しく非難する一方で、唐代の派閥の首領、牛僧儒が係争領土を吐蕃に返還した信義を熱烈に賛美して、後世に物議を醸した。だが実は、これらの意見は蘇軾や司馬光の歴史観念を現しているのではなくて、北宋の党争渦中の彼らの立場を反映しているにすぎないのである。

〔蘇軾が熙寧一〇年（一一七七）に奏上した〕「張方平（一一〇七～九一）に代わって用兵を諫める書」は宋代に桑弘羊の政策を引き継ぐ者たちを痛罵し、神宗は敵軍以上の戦争責任を負うべきであるとはっきりと宣言した。「民衆を損なうやり方はさまざまですが、軍事を好む者は必ず滅びます。……宮廷の中では国庫が空で、外では民衆の食糧がありません。飢えと寒さに苦しんだ後、盜賊に襲われるという災いが生まれ、死傷者と残された者の悲しみが尽きるところ、洪水や旱魃の報に接せねばなりません。軍隊の上層が多く兵士を擁していれば独立の下心が生じますし、その下層の多くは戦役が長引けば謀反の気持ちに駆られます。異変はいずれも用兵に発するものです。薛向は西夏との戦いにおいて横山全域の占領を企て、韓絳（一一〇一～八八）は敵陣營に深く攻め込む計略に従い、陳升之は非難を受けることになります。また、函谷関以西の子弟たちの生命を脅威にさらすことにもなるでしょう。わたしは、辺境の人々が今後反乱に向かうとするのではないかと恐れるのです。」

〔二〇一〕七九、呂公弼〔一〇〇七〕七三〕らが密かにこの動きと協力して、皇帝軍は敗走に追い込まれ、財政を蕩尽しました。その損害は確かに宝元〔一〇三八〕四〇〕、慶曆〔一〇四一〕四八〕の西夏戦争の敗北の一割にも満たないものではありませんが、天は怒り人は恨み、辺境の軍隊は離反し、首都は騒然となり、陛下自身、戦後処理に忙殺されて、夜遅く食事を摂ることが何か月も続きました。どうしてこうなったのでしょうか。用兵のきつかけは、陛下が作られたものです。したがって、官僚も士大夫も敵方を恨みには思わずに、陛下のやったことを正しいとは考えなかったのです。それでも、先祖代々の厚きご功績、皇天の深きご加護は、出兵しても効果なきことを陛下に感得させようとなりました。であるのに、浅はかな者どもは敗北を恥と考え、勝利を何としても得ようと、陛下の歎心を買うことに努めたのです。こうして王韶〔一〇三〇〕八一〕は熙河に事を構え、章惇は横山へ侵攻し、熊本〔一〇二六〕九一〕は渝〔重慶市〕と瀘〔四川省瀘州市〕で攻撃を開始しました。しかしながら戦果はと言えば、そうやって強力な賊を降伏させ、老人弱者を苦しめ、陛下の腹心を苦しめたあげく、からっぽで役に立たない土地を得ただけなのです。陛下はこうした虚しい名声に溺れ、災いの実際を見て見ぬ振りをされ、さらなる侵攻へと向かい、功名を立てんと奮い立たれました。そこで、沈起、劉彝が安南を再攻撃したのですが、一〇余万の兵士たちを熱帯病の中に晒し、死者は五割から六割にも達して、道行く兵士たちは、輸送の途次で倒れ、食糧や兵器も、戦争で使われる前に取られる始末です。わたしが考えるに、用兵の極意とは、衰えを減らすことです。それなのに、李憲〔一〇三五〕八六〕の軍隊は洮州に出兵しました。現在、西軍は勝利のうちに凱旋し、鋭気が天を衝き、陛下がこの勝利を寿がれますのは、周囲の夷狄を軽視し敵国を侮る気持ちがあるからに違いありません。天意はまことに測り難く、わたくしめはこれを畏怖するばかりです。」宋人の最大の利益が東アジア国際システムの安定化にあったことをここから見て取

るのは容易である。この国際システムは平和において最大の利益をあげ、戦争において最大の損失を生む。しかしながら、汴京の朝廷は自ら作り上げたイデオロギーにかんじがらめになっていた。神宗の軍国主義は新党の専売特許だったのではない。それはまた一統をたつとぶ原則が士大夫に遺した遺言でもあった。岳飛や韓世忠（一一〇八―一一五二）が漢代の衛青や霍去病のミッシェンを履行できなかったのであれば、それは衛青や霍去病を生んだ民衆の実情や時勢がすでに過ぎ去ってしまったからである。